2025年度 松山大学 経済学部
一般公募推薦編入学・指定校推薦編入学試験

◆小論文◆ (60分、800字以内)

四国4県に点在する88の仏教寺院を巡る四国遍路(四国八八ヶ所巡礼)をめぐっては、近年、世界遺産化のための運動が起きている。これについて、つぎのエッセイを読み、問いに答えなさい。

「四国遍路を世界遺産に」という取り組みに、懸念を抱く意見がないわけではない。例えば、スペインの巡礼道「カミーノ・デ・サンティアゴ」のように急激に巡拝者が増えたとしたら、今までのような習俗や雰囲気は守られるのだろうか？

また世界遺産になると当然、原則的に景観や建物等の「現状維持」が求められることが多くなり、その改変には逐一手続きが必要になるだろう。しかし札所寺院にしても、遍路道にしても、人々が歴史の中で長く「暮らしてきた場所」であり、今までがそうであったように、これからも現代社会や新しい文化に応じた風景や機能の新陳代謝が、必要である場所だ。しかし「世界遺産」に認定されると、そのような変更が場所によっては容易にはできなくなる可能性がある。それだけ「四国遍路」が、そこに住む人々の生活と密着している証拠でもある。

しかし、私はそういった課題をひとつずつクリアしながら、可能性があれば、四国遍路を世界遺産登録に向けて進めるべきだと思っている。四国遍路が持つ貴重な宗教性や精神性は、多くの人が潜在的に求めているものだというたしかな手応えがあるからだ。このまま国内の人口減こともない、だんだんと巡拝者が減ってゆき、「過去の遺産」になってしまえば、あまりに惜しい。世界遺産への取り組みを通して、その価値に、人々があらためて気づき、実際に巡拝をする契機になってほしい。

「海外からの巡拝者の急増」を歓迎する人のみではないことも承知している。しかし、四国遍路を開いた弘法大師・空海は、法を求め海を越え異国の地(唐の長安[現在の西安])で密教を授かり、日本に真言密教をもたらし、それは当時の唐の人々が、海外からの修行者を受け入れてくれたからこそ可能になったことである。世界の人々が、四国遍路に休息を求め始めている今、今度は私たち四国が、手を広げたい。

(出典：白川密成「四国遍路の世界遺産化の賛否を札所住職が語る『今までのような習俗や雰囲気は守られるのだろうか?』」ブックバン、新潮社、2023年)

【設問】札所寺院の住職による上記エッセイをふまえたうえで、四国遍路の世界遺産化に対して賛成、反対、どちらかの立場を選び、最初にそれを明記したうえで、その理由を合計800字以内でまとめなさい。その際、①世界遺産化のメリット、デメリット両方に言及すること、②以下のキーワードをすべて用い、必ず各語の右側に傍線を引くこと。

【キーワード】

伝統	宗教性や精神性	日常生活	地域住民
観光	経済効果	インバウンドツーリズム	